

特集Ⅰ 国際協同組合年、再び

01

参加と交流を通じて、
楽しくつながりを広げる
『OCOnoMi おおさかの取り組み』

加賀美 太記（阪南大学流通学部）



【加賀美】まずは OCOnoMi おおさかについて、現在の参加団体から教えていただけますか。

【高橋】現在は12団体が参加しています。協同組合だと、大阪高齢者生活協同組合、大阪府漁業協同組合連合会、大阪府森林組合、大阪府生活協同組合連合会、大阪府農業協同組合中央会、近畿労働金庫、こくみん共済coop大阪推進本部、生活協同組合おおさかパルコープ、労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団関西事業本部です。

また、非営利セクターからは、一般社団法人の大阪労働者福祉協議会、社会福祉法人の大阪ボランティア協会、そして日本赤十字社大阪府支部も参加されています。

【中村】大阪の特徴としては、日本赤十字とボランティア協会、それに近畿労金も入っているところだと思います。2020年の設立時は9団体だったのですが、2022年にJCA（日本協同組合連携機構）から提案のあった、地域について話し合う場（ラウンドテーブル）を作っていこう、そのためにOCOnoMiの会員を増やしていこうということで、周りに声をかけ始めました。その結果、2023年に新たにパルコープ、こくみん共済、高齢協の3つが加わって現在に至るという流れです。

大阪に連携の組織をつくる

【加賀美】今、話にも出た設立についてですが、OCOnoMi おおさは2020年に設立された、全国的にもかなり若い地域の連携組織です。設立までの具体的な経緯はどのようなものだったのでしょうか。

とくに前回の国際協同組合年付近の大阪府内での動きや、2020年というタイミングで設立に至ったきっかけなどはあったのでしょうか。

【中村】 実は 2012 年の国際協同組合年のときは、協同組合や非営利セクターの連携は何もなかったんです。

【加賀美】 大阪府内で協同した国際協同組合年実行委員会とか、そういった組織や取り組みも特になかった…？

【中村】 ありませんでしたね。もちろん、それぞれの団体は国際協同組合年に取り組んでいました。たとえば、賀川豊彦のお孫さんを招いた記念講演会を開催していました。団体ごとに協同組合年には取り組んでいましたが、組織間の横の連携とかの、話は一切ありませんでした。なので、国際協同組合年後も、とくに大きな動きはありませんでした。そもそも、大阪にそうした連携組織が「ない」こと自体を知らなかったのですよ。

きっかけは何だったかという、JCA の立ち上げをした時に、47 都道府県のうち、連携組織がないところは 6～7 つで、大阪にもありませんよ、という話をお聞きしました。そこで、なぜ大阪には連携組織がないのかと、いろいろな方にお話を聞いてみました。JA やその他の団体にも聞いてみましたが、みなさんまったく知らない、と。作ろうとしたことがあるということもなく、逆に作ったけどうまくいかなかったという話もない。当時の事情、全然わかりませんでした。そこで、これを機会に作ってしまおうという勢いで、JCA の発足時に、大阪でも連携組織を作りますっていう決意表明というか、大阪で頑張ってみますという話をさせていただきました。そこから組織作りに動き出して、それが発足のきっかけになりました。

それがちょうど 2018 年。10 月に近畿労金と生協連が共催で、JA 中央会、漁連、

森林組合が後援に入った「協同シンポジウム 2018in おおさか」が開催し、国連広報センター所長の根本かおるさんと日本協同組合学会会長の田中夏子さんを招いて、SDGs と協同組合の役割を学んで、協同組合や NPO の活動連携について意見交換を行いました。これをきっかけとなって、今後一緒に色々なことをやっていきましょう、という感じでスタートを切ったという流れです。

【加賀美】 そうなると OCoNoMi ができる前、たとえば、生協としては JA などのお付き合いはなかったんでしょうか。

【中村】 生協と JA・JF とは、事業的にはありましたが、顔が見える関係という感じではなかったですね。近畿労金とはお付き合いがありました。近畿労金が NPO とも繋がっている関係で、生協の組合員から近畿労金の学習会を入れてほしいなど、つながりは割とありました。

【高橋】 それでいったら、当時のワーカーズなんかもう全然縁遠い存在ですよ。

【中村】 そうだったかもしれませんね。地域レベルの連携組織を知ったことから、大阪でも作ろうということで、協同組合間での話し合いをスタートさせました。全国で連携組織には協同組合だけじゃなくて、色々なところが入っているよ、という話も聞いてきました。それで、ワーカーズや労福協にも一緒に何かできないですかねと声をかけました。

2019 年には各団体の代表者の懇談会をやりましょうということになり、各団体がどんなことをしているのかを話してもらいました。11 月に 3 度目の懇談会をした後

には飲み会もあって、そこで参加者同士が仲良くなったというのも大きかったですね。

翌年 2020 年の 1 月から 3 月にかけて、本当に連携組織を作っているのかということ共有する設立のための準備会議や規約・体制づくりを進めました。また、同じ時期に、今年も参加した、西日本最大級の国際協力のお祭りであるワン・ワールド・フェスティバルで、取っ掛かりとして何かやってみようと、セミナーの開催や活動紹介ブースを設けました。

その流れで、当初は 2020 年 4 月には設立するつもりでしたが、ちょうどコロナ禍に突入し、設立は 7 月に延びてしまいましたが、無事に設立の集いを開催することができました。

【加賀美】 JCA 発足のタイミング以降、かなりダイナミックに事態が動いたんですね。

【中村】 本当にそうですね。赤十字の参加も、決まったのは設立の直前でした。最初は、大阪で大きな地震とか災害があったときのために、平時から繋がりづくりをしようというおおさか災害支援ネットワークという組織がありますが、そこに生協とボランティア協会と赤十字が参加しました。協同組合や非営利セクターの連携組織ということは、災害のことも絡んでくるはずなので、赤十字にも声掛けしようとなりました。赤十字にお声掛けしたのは 5 月頃でしたから、本当に急遽決まりました。その声掛けも、赤十字と生協との間で、以前からつながりのあった関係者がおられたのが大きかったです。全国でも赤十字が連携組織に入っているところはないと思います。

【加賀美】 ちなみに、OCoNoMi おおさかの設立において、設立目的はどのように共

有されたのでしょうか。

【中村】 基本的には、協同組合や非営利組織が繋がって、連携ができればいいなというところ。ガチガチではなく、ゆるやかに連携が進む組織になればいいというように。最初からガチッと決めて、この事業を成功させるためにやります！といったものではありませんでした。

【加賀美】 たとえば広報による協同組合のイメージ向上なども、明示的になっていたわけではなかった感じなんですか。

【中村】 広報面もそうですね。全然そこまではしていません。でも、何か企画があったときには広報するようにはしていますよ。マスメディアに取り上げてもらえる機会は、残念ながらなかなか少ないですが(笑)

ゆるやかだけど、 しっかりとつながる仕組み

【加賀美】 現在の OCoNoMi おおさかの組織の運営体制などはどのようになっているのでしょうか。

【中村】 まず、協議会の会長が森林組合です。他の県等で森林組合が会長・代表というところはないのではないのでしょうか。副会長が JA 中央会と近畿労金と生協連になっていて、ワーカーズに監事をお願いしています。

運営の基本は幹事会です。全構成団体から幹事を選出してもらっています。この幹事会の世話役として JA 中央会、近畿労金、生協連の 3 者が会議の骨子について事前に

話し合いをしています。幹事会は2カ月に1回程度、去年は1カ月に1回ぐらいの頻度でしたが、割と頻繁に開催しています。

また、幹事会とは別に協議会には委員会というのを置いています。こちらも全ての構成団体が参加して、年に1回開催しています。この委員会では参加会員を増やす方針や、新たに参加した組織の確認などを行います。

【加賀美】 日常的に参加団体の会合を持たれて運営されているんですね。

【中村】 そうですね。対外的な代表事務局団体はJA中央会とし、実務面は生協連で役割分担になっています。幹事会委員会で運営しています。

【高橋】 幹事会への参加率も高く、欠席はほとんどないですよ。協同組合以外の日赤やボランティア協会、労福協も、日常的に幹事会に出てきていただいています。

【加賀美】 設立から4年が経ちましたが、この間、OCoNoMi おおさかが取り組まれている活動をご紹介いただけますか。

【高橋】 活動はいくつか行ってきていますが、イベントへの参加でいうと、先程のワン・ワールド・フェスティバルへは継続的に参加しており、つい先日も参加してきたばかりです。また、漁連の関係で魚庭（なにわ）の海づくり大会というのにも、OCoNoMi おおさかとして参加しています。2022年はOCoNoMiの構成団体の紹介パネルとたこ焼きの販売を行いました。また、OCoNoMiで市民向けに学習会を開催したり、関西大学でキャリアセミナーと寄付講座をおこなっています。今年からは



関西大学商学部寄付講座
(2022年9月～2023年1月 15回開催)

摂南大学でも開講する予定です。

若手職員合同研修も行っています。協同組合とはなんぞやというところを、せっくなのでみんなで学ぼうという点が始まりです。そして、実際そこで学ぶ若手職員こそが、未来の協同組合のリーダーになるわけで、そうした若手を育てるとともに、お互いのつながりができるようなことにも取り組んでいます。今年度、この研修に参加したみんなでバーベキューもしましたよね。

【中村】 そうでしたね。高槻市に森林組合の森林観光センターがあり、そちらで風倒木被災地復興植樹とあわせて、先程の若手の研修に参加した職員や、OCoNoMi おおさかの幹事会のメンバーとが一緒にBQQをしました。



若手職員合同研修
(2023年2月24日開催 大阪赤十字会館)

【高橋】楽しかったですね、みんなで食事するの。やっぱり自分ところの研修だと、どうしても限られた範囲の話になってしまうので、それこそ全然知らなかった森林組合や赤十字の活動を知れてよかったという声も含めて、研修はすごくよかったと感想を伺っています。ワーカーズでは、結構意識的に20代に参加してもらって、経験を積んでもらおうと考えています。

【中村】実は当初 OCoNoMi おおさかでは年一回の委員会の後に毎年行っている国際協同組合年の記念講演会と、2月にあるワン・ワールド・フェスティバルの年2回の行事を予定していました。幹事会では、まずその2つを柱にして、そこに向けて話し合いが進めたらいいよねとしていました。

ところが、2022年の国際協同組合記念講演会のあとに、参加者全員でグループワークをしました。そのお題が、OCoNoMi おおさかでこんなことができたなら楽しいよねと思うことをグループで話し合ってくださいというものでした。結構どのグループも盛り上がりまして。自分たちの組織以外のことですので、ある意味、自由にこういうことをやれたらいいよねっと意見がどんどん出てきました。ただ、こんなに意見を出してもらったら、それは実現をしないといけないと、2022年度は色々取り組みました。先程のキャリアセミナーや若者研修も出た意見の一つで、協同組合に就職する人たちを増やす取り組みができたらいいいよねとか、若い職員があまり協同組合のことを知らないの、若手の研修が一緒にできたらいいいね等の意見がもたっています。

ですので、幹事会は年3～4回程度で十分だろうと思っていましたが、この研修を実現するためには、幹事会しないと具体的

に話進まないため、2022年度は毎月のように幹事会をすることになり、ちょっと大変でしたね。とはいえ、楽しい企画もでき、セミナーなども増えてきたので、それなりの繋がりや連携もできてきたという手応えはありました。2023年度の国際協同組合年の記念講演会のあともグループワークをしました。そのときは新しく何かをしたいという話はしませんでした。これ以上企画が増えても、手が回らないので。

そこで、もっと事業的な、あるいは地域での繋がりができるような関係について話し合いを進めました。たとえば、漁連が冬は割と漁がないので手が空いている。逆に森林組合は冬が忙しい。そこにお手伝いに行ける関係ができたらいいいのでは、それぞれの実態に応じた意見が出てきました。ただ、そこにはコーディネーターというか、繋げるための仕組みが入らないと実現できないため、今後はもっと地域レベルでできるような話題を深掘していければと考えているのが現状です。

【加賀美】2022年度のグループワークが活動を広げる契機にもなったように思いますが、その場には各団体の代表者やトップ層が来られていたのでしょうか。

【中村】そんなことないです。各団体3～4名で、もちろん会長さんなどの偉い人もいますが、若手の人たちもいます。それでも、トップ同士が自由にそんな話ができるのも、面白いところです。コロナの影響で、わりとこじんまりだったのも大きかったかもしれないですね。

参加を通して築かれた 距離感を大切に

【加賀美】 設立されてから色々な活動を展開されてこられたわけですが、来年、2 度目の国際協同組合年を迎えることになりました。2025 年に向けて、改めてこれを目指したい、あるいはこんなことができたらいいな、ということについてお伺いできますか。

【中村】 正直なところ、まだまったくその話をしていません。ただ、地域でもうちょっと繋がれるような連携作りができたらいいなという思いはあります。たとえば、漁連と森林組合のつながりも、コーディネーターなしで、自分たちで連絡を取り合いやって行くことから始めるなど、事例がもっともっと増えて行けば、うちはこれやってみようか、という話につながるのではと考えています。

あるいは、OCoNoMi がハブになって、コロナのときに大学生への食の支援などを JA さんにもご協力いただいて実施してきました。現在では、食堂での支援に変えて、お米は JA に、しらすを漁連に提供いただいて、学生にも協同組合の関係性を知ってもらうという取り組みを行いました。大阪産のお米がとれることを知らなかった、大阪でしらすが獲れることを知らなかったと言う学生がいました。大学でも、学生に協同組合のことを知ってもらう機会は今後もぜひ続けたいと思います。実際、生協では森林組合・JA・漁連に学生を連れて行って、色々体験をしました。すごく楽しめました。こうしたことは学生だけではなく、地域の人たちにも開いて、もっと森林組合のことを知る、漁連のことを知るということになれば、もっと違う関係が出来るのでは

ないかと思います。

【高橋】 今の OCoNoMi おおさかに関わって感じるのは、すごい、すごいなということです。個人的には、他の連携組織もこうなったらいいのになって感じるくらいです。とくに、距離感が近いというか、いい感じで近いという魅力的な関係性が、今の幹事会で作れているんですね。そこをどう広げていけるのかが大事ななと思います。それに、どうしても人事異動で入れ代わるじゃないですか。だから、人が入れ替わっても、今の関係性、雰囲気は保たれるようでありたいなあとと思いますよね。

【加賀美】 国際協同組合年にむけてはこれからということですが、やはり今のいい距離感で付き合えてるという部分を大事にしながら進めていくということですね。こうした関係ができた点について、大阪特有の事情など、思い当たることはありますか？

【中村】 あんまり大阪特有の、というのはないと思います。たとえば、生協だけが張り切ってこうしよう、とグッと引っ張って進めることはなく、幹事会などの場面で、みんなで決めて行こうみたいなところはありますね。あくまで、こういうことをしたいんですけど、皆さんどうでしょうか？という感じです。

今では、それぞれの団体が色々提案もしてくれます。たとえば魚庭の海づくり大会には、漁連から OCoNoMi おおさかとして出ませんかとお話をいただきました。昨年はたこ焼きで参加しましたが、そのたこ焼き作りでみんな仲良くなりました。たこ焼き作りながら、色々話をしたり、結構売れたねと達成感を共有したことがあったのがすごい良かったと思います。今年

は OCoNoMi おおさかは食べ物以外の企画とのお話だったので、色々と皆さんからアイデアが出てきました。JA からはお米の量り売りで何グラム当てクイズや、近畿労金はお札の枚数何枚あるかゲームや、生協だったら商品をお買い物かごに取って、ピッタリ何グラムを目指すゲームなどの提案がありました。こういったブースでする企画を幹事会で、アイデアを出し合いながら決めていく関係性が大事なのではないかと思っています。

【加賀美】事務局が全部お膳立てしてやっていく形ではなく、やりたいものはあった上で、皆さんどうしましょうっていう、アイデア出しから、ある意味では参加してもらうことがお互いの距離感を縮めて、OCoNoMi に参加している感じに繋がっているのかもしれないね。

【高橋】確かにそうですね、みんなで意見をしっかり言って、提案して決めて行ってるっていうのはその通りだと思います。

【中村】まず意見を出すことも参加ですし、当日参加してみて、それがどうやったかという振り返りも幹事会ではすることで、この内容は良かったけど、こう工夫したほうがいいよねという話も出て来ます。すると、次回はそれを生かしましょうという流れになっていくので、全体として自分たちも参加して、振り返りをしてるみたいなのもいいかもしれないですね。

【加賀美】海づくり大会やワン・ワールド・フェスティバルには、幹事会に参加されている方も当日ご参加されているんですか。

【中村】もちろん、そうです。本人だけじゃ

なくて、誰かを連れてきますので、その場面場面で違うメンバーが顔を合わせて、またそこで関係性ができたりするのはいいところやなあと思います。

【加賀美】今後の方向性として、単協などの会員の拡大のようなことは考えておられるのでしょうか。

【中村】会員の拡大は考えていますが、単協の拡大というよりも、色々なところの参加の方が大事なような気もしています。

【高橋】僕は協同組合で働いているので違いますが、まず協同組合って、社会から見たらほんの一部であって、そもそも協同組合のことを知らない人も多いと思うんですよね。だからこそ、協同組合に限らず、いろんな人に OCoNoMi に入ってもらって、知ってもらうのも大事だと思いますよね。とくにイベントで知ってもらおうというものもあるかもしれませんが、実際に会の中に入ってもらって、より知ってもらうのも大事だと思います。

【加賀美】そういう意味では、愛称は OCoNoMi おおさかですが、正式名称が協同組合連絡協議会ではないという辺りも大事な気がしますね。必ずしも協同組合が集まって、協同組合でどうするって視点ではないというか。

【中村】そうですね。この OCoNoMi の名称も、全体の名前が漢字ばかりで、生協連の会長も、よう読まん、もうやめいというくらいでしたから。それで愛称をつけようとなったんです。このときも、すごい議論しましたね。大阪の O から始まって、最後の I (愛) を込めて、までちゃん

と意味があるんですよ、OCoNoMi のなかにはね。

それによく言われるんですが、別にお好み焼きをもじった訳じゃないんですよ。先にその言葉を作ってから、ああ、大阪らしくオコノミでええなっていう話になったんです。しかも、お好みみたいに、色々な素材が混じり合った組織でも、しっかりまとまって行くっていう意味も入れられましたしね。

【加賀美】 大阪らしくというところにしっかりとオチが付きましたね。今後の活動の広がりも期待したいと思います。本日はありがとうございました。



左から中村夏美氏（大阪府生活協同組合連合会）・高橋弘幸（労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団関西事業本部）・加賀美太記